



# 稲刈り月に想う おも

あちらこちらで彼岸花を見掛ける季節です。

「これまで（此岸<sup>しがん</sup>）に別れを告げ「これから（彼岸<sup>ひがん</sup>）」を想うといわれる彼岸花は、時空の分かれ目に咲く花のようです。

さて、中国では旧暦8月15日の中秋節に、満月をかたどった伝統的な縁起物の菓子「月餅（げっぺい）」を食べる習慣があります。

月餅を食べることは、「天と地と人」の三者が一体（丸）になることを意味し、食べることで自分が極めて重要といわれます。

月餅に家族の幸せ、国家の安泰、世界の平和を願う力があるこもるといふ思想は、脈々と悠久の昔から今に引き継がれてきました。

中秋節のころ、親しくしていた王（ワン）さんから、手の平に余るほどの大きな月餅をもらったことがありました。

そのころは「団円（家族がそろって月餅を食べながら月見をすること）」の意義も、由来も知らず、大き過ぎて厄介に思ったものでした。

月餅はお世話になった人への贈り物でもあるようです。

中秋節のころは稲刈りの時期でもあり、9月（長月）を稲刈り月とも言います。

赤トンボが、黄金色の稲穂すれすれを飛び交い、鼻先まで近づいてはくるつとターンして、収穫を喜んでくれているかのようでした。

鎌を手には思わず口ずさんだのが「夕やけ小やけの：」で始まる「赤とんぼ」。「故郷」などと並び、最も愛される童謡です。その歌詞を口ずさむ時、何ともいぬ郷愁が漂い素直になります。

童謡で歌われる筈に止まるトンボは、アキアカネといい



ます。

トンボの別名は秋津（あきつ）。秋津島が日本国の異称であったことからすれば、日本はトンボの国だったことになりそうです。

稲の害虫を食べるトンボの飛び交う様子は、昔から、いわば収穫の象徴であり日本人の原風景でもあるようです。稲刈りはこれからが本番の所もあります。

「台風よ！しばし来ないで」と願いながら豊作を祈りたいものです。

指宿市長 豊留悦男

